

明治二十年二月七日寄贈

2301

石田約翰譯

虔乃範

明治十九年七月正教會



緒言

是書は一千八百五十九年露國モスクワ府の刊行に係る書
中載する所甚多かつすといへども其事蹟一として吾人信
徒の教訓模範と成ざるは莫し豈啻吾人信徒の爲に裨益あ
るのみならず彼未だ正教の何者あると識ざるの輩も一讀
したらんには必ず多少の裨益を得べし今や譯成り直に胡
剛氏に付して世に公みす看官一讀を吝すして裨益する所
あれば幸あり

明治十九年七月

譯者識

敬虔の範目録

真正の矜恤

一

十字架の勢力

六

十字象の勢力

九

智を以て富と用ふ

十二

敬虔者の保護神使

十五

富を棄て難を免る

十七

古代に於て聖致命者の遺骸と崇敬せ

し事

二十

怨恨を以て己を滅す

二十六

讒言の説破

三十六

施濟

三十九

貪慾の罪

四十三

「ハリストス・テ・ア・ニン」の信仰の勝利及び異

邦人の殘忍

四十五

致命者の遺骸を得るの望

五十五

子の教訓母の苦難

六十七

忘恩

八十四

智識の善行と要す

八十七

ハリストス教會の外に救贖莫し

九十一

両親の祈禱の勢力

九十九

兄弟の愛情

百八

貞節の美を守るの戦争に等し

百十一

敬虔の範目錄終

外套を脱ぎて死者を蔽へり、全からん事を欲ひ、往て爾が
所有を售て貧者に施せ、然れを天に於て財あらん(マトフェイ
一十)との福音經の教に従て生活せんことを神に誓ひたるワ
サリオンの裸体の死者を見て心に安ずるまど能ひざりし
に神の又ワサリオンの徳の全く顯れんが爲其徳の他の
試と遣し給へり彼の貧き死者を僅に離れしに又途中にて
全く裸ある者に遇へり之を助々んとすれども其術なけれ
ば獨立て心中に思ふやう我の一旦遁世せし者奇れば我が
隣が互寒が爲お凍死せんとするま豈衣を着するを得ん乎
我若隣をして凍死せしめんには我自隣の死の原因となら

ん如何にせん乎己の衣を彼と我との爲ま裂かん乎寧ろ全
衣で神の像にて創造られし者ま與へん乎然れど我衣を裂
かんにい果して彼と我との益とならん乎と斯く思案を遂
げたる後件の貧者を一の屋蔭に招き自裏衣を脱ぎて之と
貧者に衣せて彼を遣ひし自己の裸と爲りて躊躇り手を以
て体部を蔽へり
ワサリオンの常に福音經と携持へしガ貧者お裏衣と與へ
し時も腋下お福音經と挟み居る此時神照管者の旨に因
て一人の敬虔なる保護者ワサリオンの傍を過ぎ之を見て
己の同行の一人を顧みて曰く看よ此父ワサリオンにあら

すやと答て曰く眞に然り保護者馬を下り福ワイサリオンに
 近づきて問て曰く父や爾の衣を褫せし誰ぞ乎ワイサリオ
 ン福音經と示して曰く是者我の衣を褫せりと保護者忍已
 の上衣と脱ぎて聖人に與へて曰く此爾が爲に完全なる軍
 士なりと翁是を受て人の名譽を避け唯矜恤ある者の福あ
 り其人の矜恤と得べければ也(五ノトフェイ)と言はれたる救世
 主の賞と望て竊に遁れたり
 此後幾もあくしてワイサリオンが斯まで矜恤の徳を重する
 ことを顯すの時至り彼一日道を行きて貧者に遇ひし
 が之を助くるの術あければ直に市に往きて未だ嘗て身
 體

を離さしりし福音經を售り其價金を以て貧者に與へり
 しが家へ歸りし時其弟子ドラの師の未だ嘗て福音經を携
 へずして何處にも行かざるを知りたれば問て曰く父や爾
 の小冊子の何處にある乎ワイサリオン自若として答て曰く
 兄や愛ふる勿れ我神の言と信と順従とと有てることとを顯
 へさんが爲此言を售れり此常に我に爾の所有を售て貧者
 に施せ(九ノトフェイ十)と謂ひしが故なり
 福ワイサリオンの如く極めて完全なる者とあらんふの勤勞と
 自棄との甚必要あり畢竟彼の例の貧者を慮ることを我等
 に教ふるあり翁ワイサリオン常に福音經を携持へ慈惠を施

して福音經を指示せり此も我等の教課とある可し我等の
矜恤なかる可らず他人を助りざる可らず蓋福音經の言の
要する所の名譽によるに非ず人の耻辱によるに非ず此と
己の矜恤に因て我等の爲に己の生命と棄たる我等の救世
主を愛するが爲にするに此福音經の言の要する所なり

十字架の勢力

アンテオヒヤの村に或時最猛き狼の現出しことありしが
彼の屢己の窟よりいで、途々逢ふ所の人をも家畜をも食
盡せり近隣の住民の之を退治せんとく如何に力を盡し幾
度か弓箭或は他の武器を以て之に向ひしかば彼等の勞の

皆其效なく怒らされたる猛獸の失場に彼等を多く殺せし
が半生の者及傷を負ひし者の漸く彼より遁れたり而に彼
の他の強壯なる者を己の窟に引込み彼處に於て食盡せり
全村の爲大なる不幸なり
是に於て住民の人力を以ての何事も爲能はずといふを知
りて神に向へり當時此村に近き一の修道院に金口聖イサ
アンあり徳を修め行を砥きたりイサアンの未だ若年にし
て尋常の修士にて有たれども彼の既に德行と奇蹟とを以
て榮せられされば民の彼に向ふて彼が己の祈禱と神に代
求ることを以て斯る難より民を救助せんことを彼に願ひ

しに聖イサアンの彼等に木の十字架を與へ狼の出る所に
 之を建てんことを命じたれば住民の直に此の如く行ふて
 家に歸れり
 十字架と福イサアンの信仰の力との神の光榮を顯へすま
 と遅緩かゝらず數日も過たりしに猛獸も現れずして既に
 彼より受くる所の新なる不幸と危難のこゝを聞ざるに至
 れり當時或者の彼が如何になりしやを窺ひ知らんとて恐
 るゝ狼の窟に至りて自己が驚異にて潔淨なる十字架と
 イサアンの信仰とを讃揚げしに會て衆を恐怖せし猛獸の
 十字架の下に在て死せるを看ふり

「ハリステアコン」や潔淨なる十字架の唯無形の敵に於ける
 而已ならずして我等の爲に武器及び楯となりて勤むるな
 り十字架の形の我等より魔鬼を逐ひ彼等の奸謀を破りて
 堅く信する「ハリステアコン」の爲めに有形の敵よりも救助
 せんことを勤む又有形無形の敵に對して自然の力足らざ
 るとき之を救助せんが爲に十字架の勤めし例及此の如き
 ことを甚多く見るなり

十字象の勢力

克肖者イサアンニキイの少年の頃其父の羊群を牧せり然
 に敬虔の愛の彼に常に羊群を慮ることを許さずして屢彼

に羊群を避けて新橋に赴かんことを勤めたり
彼の常に十字架の象を以て己の羊群を蔽ひしが彼に蔽
れたる群の彼が在らざる時も散ずることなく牧者なくし
て居れり又盗賊も猛獸も之を奪はず此象の勢力の斯斗大
なり敬虔なる少年の既に日暮るゝに至れば新橋より歸り
全數にして害を被らざる羊群を其家に逐ひ歸せり
己の功績と勤勞とを以て純全なる神靈の生活に達せし
チアンニキイの或時ボルガルの地を經過りしがボルガル
にハグレチヤの囚徒が臭氣ありて昏黒き罫圖に繋がれ斯
る艱難に在らんよりの罪殺されんとを望むるを知り彼の

看監に見止められざるやう罫圖に近づき罫圖の戸を十字
架の象にて蔽ひたりしが罫圖の戸を開きたるのみならず
囚徒等も鎖錠より解かきたり此の如にして自由にせられ
たる囚徒等の看監に見止められずして彼に従て罫圖を出
たり
トリハリノウ山に於て或る不謹慎なる修士イサアキイの
許に在りしとき克肖者イチアンニキイの十字架の象を以
て園中より螟蛉を逐除たり
彼の大齋者ゲオルギイを見んとてヘリドンに行きしにゴ
ラムといへる河の邊を通行して河水を搖動せし恐しき蛇

を見たれば彼の十字架の象を作して此を殺せり

智を以て富を用ふ

一の敬虔にして熱信なる俗人あり大に富しが彼の其富を増殖せし神に感謝せん爲主の命お因り愛を以て貧者乞食に其富を分與へり然れども此の彼が近隣に熾なる愛又の神お熱中なる信と委託との爲に未だ充分ならず
彼の既に成人せし己の子を呼て之に謂て曰く吾が子や汝が尤望む者を自撰べよ我汝に金錢を還さんか或の汝をハリストスの保護に託するを願ふ乎其子暫ありて對て曰く我ハリストスに託せられんことを尤望めり蓋凡て他の者

の日々に消滅と父の其子の智なる答を賞して己の富を悉く貧者に分與へり彼が死せし後の其子極て貧窮に陥れり
彼のハリストスの保護を信じて遺されたればなり
此時他の敬虔おして德行なる貴族の人が同く生活せり彼に眞正に己の性を飾たる神と畏るゝの妻なり彼等の一女が年頃に到りしとき妻夫おいふて曰く我等の子の唯一女あるのみ而して主の大なる富を以て我等に蒙らせり夫問て曰く女の爲に何が足らざる所ある乎妻對て曰く若我等の富む所我等と同じきも惡心ある人に女を與へんとせん
に女を愁へしめん神に因て女と愛し己の愛を以て熱中

ある所の貧者即神を畏るゝの人を我等彼の爲に求めんこ
 どの善からずや
 夫曰く汝善く思へり然らば斯爲す可し即聖堂へ行きて熱切
 に祈禱して彼處に座し第一に聖堂に入たる者を以て神に
 撰ばれたる女れ夫と爲さん
 聰明ある妻の己が夫の相談を遂げたれば夫婦の深く神に
 委託せしこと全く賞せられ己の財貨を悉く貧者に分與
 へし富者にして且仁慈ある人の子ある少年聖堂に入りた
 れば妻の彼が入たる後彼も己の僕を遣ひし僕の妻の許ふ
 少年を誘致たり

妻少年に問て曰く爾の何處より來りし乎彼其生國と住所
 といへり又問て曰く爾の父の誰ぞ乎少年父の名をいへ
 り去ば爾の此仁慈なる者の子ある乎然り爾の結婚せし乎
 未だし
 妻主と讃揚して少年にいふて曰く妻と富とを爾に遣ひし
 爾が神を畏れて妻と富とを獲んが爲に我も至善なる照管
 者を讃揚せん
 此の如く貧窮に遣されたる少年のハリストスの信任の保
 護に因て復富を獲たり
 敬虔者の保護神使

父^{ちち}モイセイの不^よ潔^{けつ}の意^い思^しに漂^{たふ}蕩^{たう}されて之^{これ}と闘^{たか}ひしが己^{おのれ}の室^{むろ}に居^まるの力^{ちから}を失^{うし}ひ之^{これ}を避^さけんが爲^{ため}彼^{かれ}の速^{すみ}に起^{たつ}て神^{かみ}靈^{りゆう}の功^{こう}績^{せき}の行^た爲^ぎを經^た験^{げん}たる父^{ちち}イシドルに己^{おのれ}の誘^{いざ}惑^{まど}のまどを告^{つげ}んとして行^ゆけり

イシドルの如^い何^かお彼^{かれ}に室^{むろ}に歸^{かへ}りて永^{なが}く意^い思^しと鬥^{たか}ひんことを勸^{すす}むれどもモイセイの肯^がんぜずして彼^{かれ}に抗^か拒^{かく}ふこと能^{あた}はずと答^{こた}へり是^{こゝ}お於^あて經^{けい}験^{げん}の翁^{おきな}の彼^{かれ}を携^{たづ}へて屋^{やしろ}上^{うへ}に升^{のぼ}りて西^{にし}を視^みんことを命^{めい}じたり

父^{ちち}モイセイの之^{これ}に従^{したが}ひ己^{おのれ}の眼^めを西^{にし}に向^むけしに彼^{かれ}の擾^{うだ}乱^{らん}の狀^{かたち}及^{かつ}現^{あら}然^{ぜん}門^{かど}に赴^{おもむ}く所^{ところ}の無^む數^{じゆ}の魔^ま鬼^きを視^みたり斯^{かく}てイシドル

の彼^{かれ}に東^{ひがし}を視^みんことを命^{めい}じたりしに父^{ちち}の此^{こゝ}方^たに光^{くわう}榮^{えい}にて蔽^{おほ}へられたる一^{いつ}層^{そう}多^た數^{じゆ}の神^{かみ}使^しを視^みたり

經^{けい}験^{げん}の翁^{おきな}の顯^{あは}れを以^{もつ}てモイセイを教^{おし}へ又^{また}言^{ことば}にても教^{おし}へて之^{これ}に云^いて曰^{いは}く神^{かみ}が諸^{しよ}聖^{せい}人^{にん}を助^{たす}けんが爲^{ため}に遣^{つか}はせし者^{もの}を看^みよ西^{にし}に在^ある者^{もの}の彼^{かれ}等^らに對^{たい}して爭^た鬥^かを起^{おこ}せり然^されど爾^{なんぢ}の我^{われ}等^らの扶^{たす}助^{たす}者^{もの}の尙^{なほ}大^{たい}あるを看^みたり

モイセイの神^{かみ}と感^{かん}謝^{しゃ}して平^{へい}安^{あん}と警^{けい}戒^{かい}とを以^{もつ}て己^{おのれ}の室^{むろ}に歸^{かへ}れり

富^{とみ}と楽^{らく}と難^{なん}と免^{まぬ}か

或^{ある}る富^{とみ}たる石^{いし}工^かあり己^{おのれ}の子^こと借^かに買^あ易^{やす}の爲^{ため}に他^た國^{こく}お往^{むか}く

まどありしが彼バ其悉の貴實と高價なる物を取纏めて船
 又積み斯て祈禱を以て出立せり
 彼の殊特なる神の守護に因て船中お於て彼お給事し其の
 食物に因て養われざる所の少年を愛せり少年も亦善なる
 己の保護者に感謝せざる者に非ず
 或時船の氷夫等が相互に耳語ことありしが少年の注意て
 これを聞しお彼等の其給事せし富たる石工を海に投じて
 彼の貨物を押領せんことを謀れることを知りしかバ彼の
 憂鬱ひて己お平常の勤の爲に富者の食臺に來りしに富者
 彼に問て曰く少年や爾の今日如何にして斯く憂鬱ふる乎

少年黙せり富者復彼に問て曰く予お明白に告げよ爾の何
 を爲さし乎是に於て懇情なる少年の涙を流して彼に凡
 て氷夫等より聞たることを告たり富者問て曰く爾の眞に
 之を知る乎少年答て曰く然り彼等堅く之を決せり
 富者の己の子を呼びて彼に背戻かずして凡て我が言ふ所
 を行はんことを命じたましが聴て彼の櫃を取出し衆人の
 前所お於て此櫃より寶石と凡の高價なる物を出し斯て後
 衆に向て曰く生命の此物に在る乎我海に投せられんとす
 るの危険に遇ふも此物の爲乎我已の爲此生命より何も採
 されども早く死するの此物の爲乎子歟總て此と海に投す

可し

彼の子の速に父の命を行ひ悉くの物を取て海に投せしむ
氷夫等の恐怖で惘然たりしが遂に己等の悪意を棄て富者
の己の貨財と亡ふて己の生命を救へり

古代に於て聖致命者の遺骸と

崇敬せし事

聖致命者の遺骸の崇敬の第一世代の「ハリステアノン」に在
ての損耗も難艱も死の恐怖も之を強る能はず窘逐者も容
易み此を止むること能はずと斯の如く大なるが故に福音
の従者のハリステスの名の表信者の遺骸に對して不信心

なる狂妄の證者もあふんよりの寧此爲に艱難して激烈な
る苦辛に死せんことを希望せり

デキイの窘逐の時にインドと云る一人の島の管理者
メリアンの許に引致せられ彼れ前「ハリステアノン」とし
て責められしが多の仁愛と威迫と久き苦難の後聖致
命者の動かす能ざる己の信に止まれりメリアンの速に
彼を猛獸と投擧へんことを命じたり

聖「ハリステアノン」等が常に致命者等の遺骸と取り及び之
を凌辱より救ひしよどの一般の眞實ありしる管理者も此
事を知れり故に「メリアンの兵卒に裂かきたる聖インド

ルの遺骸を不注意にして存せんこと許さずして誰かハリ
 ステアニン等より彼の爲に來らざるかと遙に以て、視察
 せんことを命じたり此の如き豫備ハメリアンに知れざ
 るの「ハリステアニン」等にも指示すまを得たり蓋彼の彼
 等が如何なる際にも苦難者の遺骸をして異教人の凌辱を
 免かれしむるを信用すればあり
 結局又致命女讚む可き女讚む可き母メロピヤの遙に致命
 者の遺骸又彼に立られたる兵卒に目を付しが熾に已が苦
 難者の遺骸を有たんことを望み彼の其生命を害ふとも之
 を獲んことを決心せり彼の堅く己の事業の聖なるを信じ

神の助を望みて己の婢を携へ之と偕に夜竊に致命者の聖
 骸と取らんとて出でたりしが番兵等の彼を認めざるハ神よ
 好せらるゝ故を彼も自由にして障碍なく聖骸を己の家
 に持來れり此際聖なる處女ハ己を棄るの心を萌せり
 明日メメリアンの致命者の遺骸を尋ねたりしが竊に「ハリ
 ステアニン」等に取りられたることを知りたれば彼の番兵等
 を縛して彼等を鎖鎖に繋ぎ市街に引致して無慚に打擲せ
 んことを命じたりしが遂に多の拷問の後若彼等が期限内
 に竊取の罪人と探索せざらんハ劍よて斬らるべしと布
 告せられり此事と聞て聖メロピヤの心ハ憐憫と慈悲に

て充滿され彼等が頭を斬れんと知て彼等の不淨者たりと
 雖彼等と救はんことを決心せり彼私語して曰く若此人々
 の吾が爲に斯苦難し若彼等に罪なくして頭を斬らるゝな
 らば我の神の恐しき審判あ於て悲嘆せん若干の人々の死
 の罪の我に於て悲嘆あり彼曰く友や汝が失ひし体の汝が
 眠りし時妾これを取れりと死刑に處せられし兵卒の喜ぶ
 可きに彼等の却て致命女の功を忘れて此時感謝の代に罵
 詈を以て彼を捕へ速に縣令メモリアンの前に引立ていふ
 て曰く死者の体を窃取りしこれありメモリアンメモロビ
 ヤに問て曰く此實ある乎彼答て曰く實あり

罵詈を以てメモロビヤを蔽ひしメモリアンの速に彼を尤猛
 烈ある苦を以て苦めんと命たりしが多くして且長
 き苦難の後彼の己の靈を神に渡せり彼の熾々聖致命者の
 遺骸と有たんと望みて自ら血を以て己れ体を洗ひ之
 を清潔にして神の前に立つの致命女とされり
 此の如き致命者の遺骸の恭順ある尊敬の例の聖メモロビヤ
 に因て眞に驚くへし彼の生命を杜絶してもハリストスの
 名の表信者の体を陵辱の中と遣さんより寧ろ苦難を受け
 猛烈なる苦にて死せんことと望みたり故に先見者が彼を
 番卒等の眼より救ひしとき彼の彼等が深き「ハリストス」教

の敵なると雖ども他人の艱難の原因にあつんよりの寧自
艱難せんことを肯ぜり

「人その友の爲に己の命を捐るの此より大なる愛のあし」
（イ
ア十三五）

怨恨を以て已を滅す

「爾曹もし人の罪を免さむ天に在ます爾曹の父も亦なんぢ
らを免し給とん然どもし人の罪を免さずば爾曹の父も爾
曹の罪と免し給はざるべし」
（マ十四、十五、十六）
の救世主の言の
如何と厳しく如何と確と遂ぐるの力を左の事件に因て視
ん

司祭サブリキイ及び府民ニキフォルの二人のアンテオヒヤ
の出生の人にして二人の或時迄相互に親友なりしか衆人
が彼等と同腹の兄弟と稱するに至るまで一他を愛せり
彼等の間と交親と和合との永く續きたれども初より平和
及び愛の疾悪者にして仇敵なる惡魔の遠に彼等の間に怨
恨と不和との稗を播かんとせしが故ニキフォルのサブリキ
イと和睦する方法を得ざるまで彼等を互に不和にせり
親友サブリキイとニキフォルとの間と起れる怨恨は彼等相
遇いざらんことを務むる迄日々増長せしむ若之に遇ひ
しとさい一他を見ずして通れりニキフォルの此不和の惡

魔の所業なりと知りて和睦の方法を求めたれども悪魔の
サブリキイの心霊を押領して己の權より犠牲を放つこと
を欲せず

ニキフォルの直ハサブリキイと和睦せんと欲して彼ハ赦宥
を願ひ及び舊愛に復するガ爲に己の友朋と隣の或者とを
彼ハ遣ハせり然にサブリキイハ此情求を採らず又彼を赦
さいりしが故ニキフォルハ彼に己の赦宥を願ハんガ爲又他
の者を遣ハせり然に無情あるサブリキイハ此をも聞かざ
レバニキフォルハ遂に彼に三度迄遣ハせり然に彼ハ前の如
く斷然承諾せさらんことと決シ赦宥を請ふ者に對して一

層無情あるに至れり給てニキフォルの爲にするの情求のサ
ブリキイに斥けられしとき彼自彼に行て必彼と和睦せん
ことを決心せしが彼遂に行て其足下に俯伏し彼に赦と願
ふて曰く師父敎主の赦さんガ爲我と赦せ然又惡サブリキ
イハ怒と以て之を斥けて前の如く斷然之を承諾せず

此際皇帝ワレリアン及びガルリエンの「ハリストステアコン」に
窘逐を起せしがサブリキイハ「ハリストステアコン」として他の
者と共に捕ハれて裁判の爲に縣令の前に引カレ説諭仁愛
及び威迫ハ始まれり然にサブリキイハハリストステアコンの信
仰に止まりたれば縣令ハ彼を車上又引延して無慚に打擲

せんことを命じたりしにサブリキイの剛毅にして此と忍
 受けて縣令に謂て曰く爾の我が肉体にの權を有すれども
 靈にの權と有せず唯我等の主イエススハリストスに
 權あるなり彼のサブリキイをハリストス教よと離すこと
 能はざるを見て此の如き命令を下したり即王命を輕蔑し
 諸神を獻祭を捧げず及びハリストスを棄ざる司祭サブリ
 キイに劍を以て頭を斷られんことを命ず
 ニキフォルの疾にサブリキイがハリストスの爲に苦難を受
 けて致命の死處せられんとするを聞きしが故復彼と和
 睦する方法と求めたり彼を死に引し時ニキフォルの道を

遮りて其足下に俯伏し彼に赦宥を願ひ我を赦宥せよとて
 呼て曰くハリストスの致命者や我多く爾の前に罪を犯せ
 り然にサブリキイの黙して答へず之を己より斥けたり彼
 の心の癒す可らざる惡に汚されたりニキフォルの他の方よ
 り進みて再度彼の前へ俯伏し彼に赦宥を願ふて曰くハリ
 ストスの致命者や我を赦せ我れ爾の前に罪を行へり爾の
 前に致命者の榮冠あり爾のハリストスを棄ずして勇敢に
 して彼の聖名を表信せり我を赦せ然に惡は依て無情とな
 れるサブリキイの復己より斥けく彼と赦宥さずサブリキ
 イを刑に引し窘途者等も其殘忍なるに驚けり彼等ニキフ

ルよ謂て曰く爾が如く斯まで無智ある者を彼等の未だ曾て見ざるなり彼の死に行くお爾の彼に赦と願ふ死者の何を以て爾に害するを得る乎ニキフォル答て曰く爾の我の何をハリストスの表信者お願ふを知らず但神の之を知るサブリキイの頭を斬るゝが爲に定められし所に引れしときニキフォルの復彼に願ふく曰くハリストスの致命者や爾お誓ふ若我人の如く爾の前に罪を犯せしあらば我を赦せ聖書に曰く「求よ然くバ與へらる」(マト七フェイ)夫我の爾よ赦宥を願ふ我を赦せ然に殘忍あるサブリキイの遂に彼が前の友朋の總の願に意を向けず彼の假令救世主の爲に苦難

するを準備せしと雖ども救世主の近隣及び敵を愛することの命を輕視したれば魔の惡の彼を押領し彼既に致命者の榮冠に當る能はずして苦難に於て表信者に助くる所の恩寵の惡ある彼の心より避たり彼に依て憂愁を致し及び擯斥たふれたるニキフォルも訝りて哀痛せり夫怨恨及び惡の時に依てハ斯迄人々の間お達するを得窘逐者等サブリキイに膝を屈めしめて爾の頭の斬らると言ひしときサブリキイ俄に問て曰く何の爲に我が頭を斬らんと欲する乎彼曰く爾の諸神に祭を捧々す王命を輕視し及びハリストスと稱する者を棄ざるが爲なりサブリキ

イ彼等に謂て曰く我を殺す勿れ我総て王の命ずることを
 爲さんと夫惡ハ斯迄人々を導引き勇毅にしてハリストス
 の爲に許多の苦を忍受し者が天に於て致命者の榮冠を得
 んぶ爲に準備せしとき彼より離れたり然も彼の疾惡ハコ
 キフォルに強かりし如く又之に反して彼を斥たるコキフォル
 の愛ハ彼に於て大奇リニキフォルハサプリキイのハリスト
 スを棄てしを聞ハ涙と以て彼ハ願へり至愛なる兄や此と
 爲す勿れ此を行ふ勿れ我等の主イエススハリストスを棄
 る勿れ爾ハ此の如き苦難を以て得たる天の榮冠を失ふ勿
 れ夫主ハリストスハ戸の前に立ち彼の顯ハれて爾ハ現時

の死の爲よ永遠の生命を賜ふ然にサプリキイハ彼ハ聽を
 欲せずして彼の願を斥け天の王とも棄てたり聖コキフォル
 ハ已が眞正の「ハリステアコン」の愛の爲に劍を以て頭を斬
 られて致命者の榮冠を得たり

兄弟と愛する者の光に居て已を躓かするもの其衷よなし
 兄弟を憎む者の暗にをり暗に行て其往ところを知らず是そ
 の目を暗に眊さるれ也(二)イノチアノ前書(三)此深淵なる眞理ハ
 明に引たる所の例之を證す既にハリストスの爲に苦難を
 受けて致命者の榮冠を得んとしたるサプリキイと障礙げ
 しハ何ぞや惡及び魔鬼の器ハ恩寵の器及び聖神の殿たる

能はず使徒又曰く凡そ兄弟と憎む者の即ち人を殺す者なり
「**同三十五章**」此の如く怨恨及び疾悪の罪の大且重し此罪の亡
滅の結局の特に「ハリステアニン」に在り永遠の愛の彼和睦
せざる敵と雖ども彼靈を試むると雖ども近隣に對して堅
き愛と有らんことと命じたり

讒言の説破

或時修士等至潔なる聖母の修道院の院長デオニシイを嚴
肅なりとて怨言たり然に彼等自彼と害すること能はずし
て彼を皇帝イチャンワシリエウイチの前に讒誣て彼を訴訟
に起さんことを決したり王の彼等れ讒言を信ぜし故院長

に速に己に來らんとを命たりしに院長の彼に蒙たる讒
言を辨駁する方法とて有らざれば大く之を愁て祈禱を
以て嚴肅の修道院の創立者なる克肖者サワ新奇蹟者に向
へり聖サワの神に代求ひること、己の助に遅緩ふずして
夢よデオニシイお顯はれて曰く兄歟何故に哀痛する乎神
の助を疑はずして王に往き剛毅よして彼の前に辨駁せよ
神の爾を人の讒言より救助ひ給ふべし
聖サワの己の仲立を以て院長を保護し讒破せんが爲に反
迎の修士等おも顯はれたり彼の説破の變ずべうらざる嚴
峻を以てするよりの寧溫柔及び愛と以て發せり彼の彼等

各人ふ夢に顯ひて曰く爾が世を棄しん怨言を以て修士
 の生活の功績を成さんか爲め乎此に爾の已を全く自由に
 して献たり爾の已の院長を怨言ち彼の涙を以て爾の爲
 ん主に祈禱せり爾の院長の祈禱の爾の讒言に勝か若くは
 爾の讒言の彼の祈禱も勝か孰か勝の歸するを知る乎
 被告院長及び原告兄弟等の皇帝の面前に召喚せられたり
 被告の親く讒者等の前も辨駁し讒者等も亦彼を彼等の前
 に面り責めざる可らざりしが神の惡なる修士等を辱め給
 へり彼等の口供及び院長への訴訟の不正にして且錯亂せ
 しが故に皇帝の彼等を辱かして放逐せんことを命じた

り榮譽を以て院長を修道院に歸せり

此の如く克肖者サワ新行奇蹟者嚴肅なる修道院の創立者
 の仲立及び代求を以て院長デオニシイの叛逆の修士の讒
 言より救助せられたり主の敬虔なる者と試誘より救を知
 給ふなり(書二ノル後)凡ハリステアニンを不正に窘逐する時
 神の佑助を絶望するは是ハリステアニンに罪なり心底と
 腹中とを知るの神の何人とも罪なく苦め褒美なくして捨
 てざるなり

施濟

主神の慈悲者フィラレトを大なる富と榮譽とを以て降福し

彼を諸侯及び國の高名なる者と共に座らせ王の最近き親戚に紹介し給ひしがフイラレトの施濟を爲し貧者を養育し之に被服し孤子と扶助あき者を保護ることを廢せざるのみあらず一層己の矜恤を倍せし衆人の施濟を請ふの或の止と得ざるに出るあり或の富を増さん爲にするあるを知り此を撰ますして施濟をなさらんが爲に福フイラレトの左の方法を用ひたり

彼の一の櫃に三の異なる囊と排列べ此中一にの金貨を盛り二にの銀貨を盛り三にの銅貨を盛り衆人を飽し及び仁慈を以て蒼生を満す神が親彼に與ふ可き所と指示さんこ

とを希ひ彼常に視すして己の手を櫃に入れ彼處より採たる金銀銅貨を即刻貧者に與へたり此時彼の請求者の衣服の美なる乎將襤褸ある乎に毫も意を向けず己の眞實なる僕カルリストも之と命たり

此神の旨を諉託し神自ら誰れ何の必要あるを知るとの信用の即時に實驗と以て明せり慈悲者聖フイラレトの自ら神が貧者を慮かると信用するの場合を有せり彼の擧を以て己の言を確定して此ことといへり曰く我れ數度相應なる服或の美ある衣服を着て施濟を請ふ人々を見たり彼等貧あらず又甚扶助ふ必要ならずと思惟ひ我少く取らんと

意を以て己の手を櫃に入れしに己の意を反して銀貨或の
金貨を取れり依て之を與へたり我又襤褸或の弊衣を以て
蔽ひれし他の者を見たり我多く取らんが爲己の手を入
れし我手の反て少く取れり此皆全く必要なるも各の請
取を知る所の神の慮を以てなるあり

シラフの子曰く子歟老たる爾の父を取れ而し其生活を
煩す勿を彼智識に乏しと雖ども謙遜を存すべし爾の全力
と以て彼を等閑あする勿れ(シラフ十二書)慈悲者(シラフレト)の修
身此の教智ある教訓に従ふて常よ之を離れず救世主曰く
「矜恤ある者の福あり其人の矜恤を得べければ也」(マトフイ)

シラフの子又曰く知べし爾若善を爲さば爾の仁恵に感謝
あふん敬虔と以て善を爲す可し彼も依らずんば則神より
報を得ず(シラフ二十)福(シラフレト)此を知れり但人の心と
人の事情の全く神の知る所なるを信せし故此指示を神照
管者に委せて己を分與の機關とのみ爲せり此眞の「ハリス
テアニ」の分與の方法なり萬事神意善及び完全に依頼す
る人の平安に在るを得なり

貪慾の罪

一人の功績者あり修道院の長に立られより此處に兄弟
各己の手仕事を以て生業となせり彼の行爲の魔鬼を逐ふ

の恩寵を受るに堪る程清淨無缺にして徳あり彼の慈惠の
 餘る己の食物及び衣服を貧者に分與へり故に人彼に物
 を贈れば彼常に曰く此より己の物を取れ我等を我等の神
 ハリストスに止むべしと視よ我僕等の將よ食えんとす視
 よ我僕等の將よ歡樂まんとす(イサヤ六十四)
 我等の手は我等を養ふべし若他人は勞を以て生活せんと
 すれど我等の責をせん此徳行ある修士の無慾と功績との
 直に何處にも著くなれり
 王も彼の徳行を開きて彼を己に召し給ひしに彼の之と久
 く談話せしが王は彼に貧の要用の爲ふ金を與へたりしふ

院長の己の素志に反して之を受け此時より貪慾に陥り牛
 象を購ひ人を備ひたり此時も常の如く魔鬼に憑れたる者
 彼に連れ來られたるしに翁は魔鬼に謂て曰く神の造物よ
 り出づ可しと魔鬼嘲弄して答て曰く我爾に従はず翁問て
 曰く何の故ぞ乎魔鬼答て曰く爾も今の我等の一人あり爾
 の神を棄て世の虚無に隸従ひより今の既に我の上如何
 ある權をも有せずと此の如く貪慾の危嶮にして且亡滅あ
 り

「ハリストス・テ・ア・コン」の信仰の勝利及び異邦人の殘

忍

怖るべきデキイの窘逐の時に當てワイフィニヤ州の縣令の前
 に聖致命者フィルス呼ばれたり初窘逐者の仁愛約束威迫と
 以て彼を異教に向いしめんと欲せり然に堅きハリストス
 の名の表信者の動かざれば激怒したる窘逐者の彼と激烈
 なる苦痛に處せしガ神照管者の奇蹟を以て致命者を此れ
 より引出せり
 先聖フィルスを縛しめて牛筋を以て無慚に打たれども聖者
 の神を感謝して皆忍受たりしが特に苦痛者ガ喜びて麗い
 しき顔を顯りせるを見しとき縣令の憂悶に由て猛烈くな
 り彼の眼を抉り鋭き鏡を以て臉を碎かんことを命じたり

しが聖者の主が其苦難を己の聖名の爲に承くるを喜び此
 苦痛をも温和にして忍受たりたり
 致命者の苦痛と如何に殘忍なるも異邦人等の一も矜憐を
 起さず却て縣令のフィルスの服従にざるより大に怒り新あ
 る刑を設けんと命じたり然に神照管者の此に至る迄
 己の表信者に苦痛することと許せしが左の刑より終局の
 刑に至る迄の奇蹟にして彼を盲なる異邦人等の教訓の爲
 に救出せり縣令の命に因り鏡の臥牀と持來りて之にフィ
 ルスを置き又言を以て彼と異教に向いしめんとする妖術者
 及び蠱惑者を招きたりしが彼等の問に答ふる致命者の言

の刑を行ふ者を狂亂れしめ沸騰したる鉛の致命者の身体
 に灌がれたり然る鉛の苦痛者を害せずして其身体を馳注
 り是時傍よ立てる者多の亡び衆人の恐れたり然に彼等の
 此の事蹟に於て表信者を防護る所の神力を觀るを欲せず
 して常に之を妖術と稱へ「ハリステアコン」の血に酩酊して
 増殘忍どあれり特に縣令の甚し如何となれば凡そ己が彼
 を正路より遠げんとするの努力の効あければあり衆人の
 行のれたる奇蹟を見又天より下たる憑徳の聲を聞たり
 然に此只一層殘酷なる刑を思案せしめたる而已なり魔の
 惡の縣令の心を持領して彼の新なる血を待てり如斯異邦

人等の心靈の盲の大き

若干時と過て此州に甘じて「ハリステアコン」を窺逐するが
 爲にペルシヤより呼ばれたるシリワンといへる人滞在せ
 り此人の品行と性質との自ら惡と爲すが爲に呼ばれし一
 事を以て既よ判斷するを得べし彼の少も緊要ならず又彼
 に秋毫の惡をも爲ざる所の血を流さんと欲せり明日致命
 者の苦められて固圀に繋がれたりしシリワンの縣令と
 共に彼を法廷に召喚しシリワンも亦仁愛と約束とを以て
 堅固なるハリステアの表信者を動さんと欲し證牒をも用
 ひ彼を異邦の寺院の華美及び諸神の光榮を以て驚かさ

と欲してファイルスをデーヤの殿に誘導して曰く此神なり我
 等の之を尊崇す若爾之に祈之に献祭せんに己の爲に
 保護者を得るのみならず他の諸神も爾が爲に保護者と爲
 らん聖人の此言を答ふるの代に己の眼を天に擧て祈禱を
 爲せしよ俄然雷轟き地震ひデーヤ及び他の諸神の偶像の
 墮落して壊れたり是に於てファイルスシリワンに謂て曰く視
 よ此爾等の諸神あり彼等の人手の作る所のみ真正の神
 の名と戴くこと能はずと然に此奇蹟も亦妖術と了解せら
 れたり彼の衆に著明なる神力に勝れたりと已と承認す
 ることと欲せずして此時又鑊に湯と沸騰して之に致命者

を投入れんことを命じたり然に茲も神の仁慈の不正の
 窘逐者等を教訓せんと欲しハリストスの表信表を縛して
 倒に湯に投入するや否や鑊の破烈し湯の苦痛者を害せず
 して流れ彼の全く害なし
 窘逐者シリワン及び縣令の衰弱へず然も他の業を執らん
 が爲に己れ家に行きファイルスを囹圄に入れんことを命じた
 り奇蹟の彼等を教訓せざるのみならずエキペトのファオ
 ンのモイセイの奇蹟に於けるが如く残忍おせり
 若干時を経てシリワンの縣令と僧と國事の爲に或嶋に出
 發せしが聖ファイルスも誘はれたり一日彼を偶像殿に呼出し

彼等を罵詈らんが爲め偶像の前まへに於おく彼を打うたんとことを命めいじたり然しかるに聖人せいじんの祈いのち禱たうの彼等かれらが抗かう神しんの主意しゆいを破やぶり俄にわかに大なる颶風くわふう起おこり地震じしんと爲なり殿だんの壞やぶれ偶像いごうの地ちに落おち多おほくの破く毀たけふりフィルスの苦痛くるしみの原もとある縣令けんれいの憂うれひを顯あらわせり聖表せいひょう信しん者じやの己おのれの窘きん透てう者じやと教訓けうくんし及び眞正しんせいの認にん神しんに向むかへんと欲ほつして彼かれに曰いふやう何故なに爾なんぢの己おのれの諸神しよしんを扶たすけざる彼等かれら地上じやうじやうに墮た落ちて恰あたか爾なんぢに扶たすけを請こふが如ごとし然しかるに爾なんぢを地上じやうじやうに打う倒たふしたるまゝに棄すて置おけりされど縣令けんれいの盲めくらの神かみの罰せつを視みずしての癒いされざるあり彼かれのフィルスを結局けつぎよくの判はん定てい迄まで固こに繫つなぐんことを命めいじたり

然しかるも傍かたはらに立たてる者ものの皆みな縣令けんれい及びシリワンの如ごとく盲めくらなるに非あらず偶像いごうの神主かみカルリニクの他たれ者ものより善よく己おのれの諸神しよしんを知しり奇蹟きせきも依より行なしたる神かみの力ちからを視みてハリストスの教けうを歸きせり是亦これまた縣令けんれいも新あらたなる攻こう撃げきを起おこさせたり彼かれの狂妄きやうぼうの無む限げんあり聖せい致ち命めい者じやに對たいする彼かれの魔まの惡あくの時ときより時ときも増加ぞうかのれり彼かれの眞まことの猛まう烈れつある苦くるしみを以もつて傳でん教けう者じやと苦くるしみめんと欲ほつして木の箱はこと造つくり之これにフィルスを入いれ鋸のこぎりと以もつて引ひかんことを命めいじたり然しかるに引ひき始はじめしとき施刑しやけい者じやの手ての弱よほりて鋸のこぎり非常ひじょうに重おもくなり如何いかある害がいも如何いかある痛いたみも聖せい苦く痛つう者じやも加くわふる能あたはず彼かれの無む害がいにして麗うるはしき顔かほを以もつて箱はこより出いたりしよ其その

箱はこ毫ごも現げん在ざいの原げん因いんなくして破や毀ぶれたれば不きん潔けつ者者等らの益えき驚おどろき恐おそ怖おそと疑い訝ぎとに依より彼かれ等ら何なにと爲なすを知らず然しかるに「ハリステアニン」に對たいする異い邦ほう人じん等らの殘ざん忍にんの甚はなは大おほあり是これ全まく盲めしふ依より爲なせり神かみ照せう管くわん者しやの遂つひに多たくの無む益えきある異い邦ほう人じん等らを教けう訓くんせし後のち聖せい致ち命めい者しやの苦く痛つうを止とめ天てんより聲こゑありて聖せいフイルスフイルスを呼よびしかば苦く痛つう者しやも手てと神かみに舉あげ心こゝろを上うへに向むかへハリストスハリストスに歸かへせしカルリニカルリニと共ともに己おのれの靈たましひを救きう世せ主しゆに渡わたせり前まへの例れいに於おて神かみの明あきらかに異い邦ほう人じん等らを教けう訓くんせんと欲ほつしたり然しかるに盲めし目ひの彼かれの力ちからを見みるまどを障さまたげ惡あくの尊たよ者せものを對たいしても

彼かれに反はん對たいせり神かみ言げんの「ハリステアニン」に明あきらかに天てんは奧おく義ぎのこどをいへり汚けが穢れと罪つみどの人ひとのこどの神かみの管くわん理り及および敵せい慮りよを多おほく塗ぬり蔽ひす若もし天てんの奧おく義ぎを知らんと欲ほつせば清せい潔けつの心こゝろと有あせざる可べからず惡あくなる靈たましひれ爲なるに多おほくの反はん對たいの光あ景けいに顯けん現げんするなり「ハリステアニン」歟や異い邦ほう人じんの盲めし目ひを恐おそる可べし致命ちめい者しやの遺い骸がいと得うるの望のぞみ

富とみ人ひとの女むすめアグラアグライマイマと云いふあり兩ふた親おやの死しせし後のちの孤あなに於おて非ひ常じょうの財さい産さんを有ありしが彼かれの結けつ婚こんに依より己おのれの自じ由いうを壓おさへらるゝを欲ほつせず身み体たいを不よ淨じやうにして己おのれの妙わ齡れいを過すし其その愛あいする所ところの僕ぼく家か宰さいボニフボニフアアイも其その惡あく行ぎやうを與ともにせり然しかるに彼かれの

善心にて乞食を矜恤み貧者を扶助たれば彼が自由の行為の外別に彼を誦諱る者莫しホコフテイも同く善心にて貧者を憐れみしが唯彼に悔改及び「ハリスティアン」の行為を勤るの時機を得ず

「アグライマ」の家の一致命者の遺骸を有せんことを欲せり蓋し彼の聖致命者の遺骸の靈を多の罪より保護すると云を聞かばなり彼の己の不浄なる行を痛悔して德行に向ふんことを欲し其寵愛者を己と呼て之に云て曰く兄弟爾の如何あ我等が罪を以て汚穢されしを知れり如何にして恐る可き神の審判に立よとを思ひざる乎己の工作の爲

あ何を神より得る乎或敬虔なる人より我聞たり若己の家に一致命者の遺骸を有して可及丈之と尊重じたらんに己の救贖の爲に大なる扶助を得罪其家に増加のすして永遠の報賞と得べしと汝も我に勧めよ今己に時來れり汝の我に如何ある愛あるか實事と以て證するを得ん今「ハリステアオン」等も窘逐の起れる國に急て我が爲に一聖致命者の遺骸を持來らんことと努力めよ我等聖堂を建て尊敬を以て之に致命者の遺骸を安置し此の如くにして常に己の爲に保護者及び防禦者として神の前に中人を有せん此後遺骸を得んが爲亦施濟の爲も多の金を彼に與へたり

蓋此時多の異邦人等の致命者等の遺骸の懸贖の爲に給して富めり
 凡聖遺骸を悉き又の膏を塗らんが爲に必要ある物を携へ己の多の僕と共に出發するるときボニフアテイ笑てアグライメに謂て曰く我が女主歟我若聖致命者の遺骸を得ざれば如何に爲すや又若ハリストスの爲に苦められたる我体を爾に持來らば尊敬ひ以て之を受取る乎アグライメ冷笑て彼を不節制の罪人と稱し彼如何ある敬虔を以て遺骸の爲に行き如何に之を取り又如何に家に持來らざる可ざるを教訓せり彼曰く今時の戲言に非ずして敬虔を以

てす可し汝の道中に於て己の凡の不法と笑談より防がざる可らず凡の聖物に近くに敬虔なざる可らず故に謙遜及び節制を以て己の道中を爲す可し汝我等が聖なる遺骸に觸るゝのみあらず之を注視することも當らざる者も勤めずんばゆる可らざると知る乎平安を以て行よ神の爾が道を管理せん
 既に道を出發せしボニフアテイの彼より己に諷託せられたる事を甚貴重且神聖と顯せり彼の己の罪を想記し痛悔を以て之を抹殺さんことを決し己の道中に於て齋し肉を食はず酒を飲まずして常に己が罪の爲に祈禱せり彼のアジ

ヤ國即當時「ハリステアコン」の審逐の起れるキリキヤの町
 ニスに到着せしとき己の隸僕に鎮靜ならんことを命ト
 彼自ら種々の刑にてハリステスの名の聖表信者等の苦め
 る所に至り之に近づきて甚驚駭恐怖れたり彼等のハリス
 トスを信仰して敬虔に生活するが爲め之を苦めたりしが
 此苦の數々にしてボニフアティは眼に恐る可き觀物を顯せ
 り即或者の頭を下よして木に懸られて火を以て焼れ或者
 の四本柱に繋ぐれ或者の鋸を以て引れ或者の鋭き鋏を以
 て裂れ或者の眼と抉られ或者の身体の部分に斷れ或者の
 旋輪に衝入れられ或者の手足を斷ちて之を碎かれ或者の

頭をかく手かく足かくして地上に置れり彼等の皆此の如
 く剛毅にして猛烈なる苦をハリステスの爲に忍耐せり如
 かに驚くべき觀物ぞ但皆安泰喜悦の顔あり
 ボニフアティの之を視て驚駭けり彼以爲らく此の如き剛毅
 の何處より致命者に來る乎と遂に自ら己の表信者を猛烈
 なる苦痛の中に堅固にし給へるハリステスを愛して致命
 の榮冠を望み彼の觀物の中に立て諸の致命者に接吻し衆
 の聞かんが爲に高聲にていへり「ハリステアコン」の神の大
 なり己の僕を扶助して之を尤も猛烈ある苦痛の中に堅固
 にせる者の大なりと斯て後復裂れたる致命者の体に接吻

し神かみお致命者ちめいしやの友ともと爲なりて之これと共ともに榮冠えいくわんを得うるゝ當あたらん
 ことを祈禱きたうせり此かの如ごとくおしてホニフアタイの罪人ざんじんよりハ
 リストスの表信者へうしんじやとなせり
 是時このとき此こゝに在ありし民たみの驚訝いぶかり特とに裁判官さいばんくわんの問とて曰いはく彼かれの誰たれ
 なるや何處どこより來きたりしやと斯かて裁判官さいばんくわんの前まへに引致ひんちして姓せい
 名なを問とれしにホニフアタイ對こたへて曰いはく「ハリストテアコン」なり是
 我われが尤もつとも善よき名なあり我われの之これを以もつて呼よばれんことを望のぞむ爾なんぢ
 若もし兩親ふたおやが我われに命いのちけし名なを知らんと欲ほつせば則すなはちホニフアタイあ
 り我われのローマローマの出生うまれなり裁判官さいばんくわん彼かれに云いて曰いはくホニフアタイ
 近さかづけよ汝なんぢの体からだ汝なんぢの骨ほねの裂さかるゝ前まへも諸神しよしんに祭まつりを捧まぐ可べし

斯かて後のちホニフアタイの神かみも祭まつりを捧まげんことを辞なせしかば多たく
 の苦くるしみの後のちに彼かれの頭かしらを斬きれり
 聖せいポニフアタイが戯たむに己おのれの女主むすめにいひしことゝ實事じつじを以もつて
 遂とたり彼かれの身体からだの前まへに罪つみの器うつせありしを今いまの清潔せいせつなる遺ゐ
 骸がいとされり誠まことの「ハリストテアコン」等らの之これを崇あや敬まへり
 アグライマの僕等ぼくらの二日ふたひホニフアタイを俟まちつも見みぬざれば
 彼かれを惡あしく思おも惟もへり彼かれを俟まちこと三日みっかに及およばずして彼等かれらの致ち
 命者等めいしやらの行傳でんを記録きろくせる一人ひとりに遇あひたりしかば之これにホニ
 フアタイの人相にんさうを解とき尋ねたりしに彼かれの僕等ぼくらに之これに類るし
 る者もののハリストスの爲ために苦くるしみめりといへり然しかるに僕等ぼくら笑わらて曰いは

く著く不淨に生活せし者の豈ハリストスの爲に苦痛と死
 受くるを得ん乎筆記記者彼等と彼處に遣りしに彼等の
 致命者等の中に裂れたる聖ポコフアティの体を得たれば彼
 等其頭を採得て其体に併せて眞に筆記者の言と信じ彼の
 遺骸と五百金よて購ふて己の女主お持參せり
 此時主の使者夢にアグライマに顯はれて曰く嘗て汝の僕
 にして今の汝の主とありし者を領収めて之を尊重すべ
 し彼の汝の生命の保護者目汝の扞禦者なりアグライマの
 驚て起きて己と共に或る教衆等を携へて聖ポコフアティの
 遺骸よ遇はんが爲に出で、歡の涙を以て之を己の家に取

れり彼の己に此の如き仲人と與へし主神を感謝せり蓋彼
 の己の爲先又主婦の罪の爲に身と犠牲よ供せり
 アグライマのローマより五里を距てたる己の邑に聖致命
 者ポコフアティの名に依て華麗なる聖堂を建築し之に大
 なる榮譽を以てハリストスの致命者の聖なる遺骸を遷移
 したりしが此に多の奇跡行はれたり多の者の靈と身体と
 の病を癒されたり彼の己の罪と救世主の前ふ洗滌はんが
 爲に己の財産を悉く乞食と貧者に分與へ十五年間齋戒祈
 禱し且不斷の勤勞を以て生活して遂に己の靈と神に渡せ
 り

此の如くボニフ、テイもアグライダも己れ前行を變へて善く己が地上の生活を終へたり前己の罪を己の血と以て洗滌ふて致命者の榮冠を得後己の不淨の爲に痛悔齋戒祈禱して涙と以て之を清潔にせり

ボニフ、テイ及びアグライダと同一生命の終に於て榮せられし或聖人等の其始人の如く我等と同情なるの薄弱の罪に外ならず然に彼等が終生の誠の悔改彼等の德行及び神聖の彼等を榮せり我等皆罪人なれども救贖を失望せず神の矜恤を希望んで痛悔と善行に向ふべし我等若自之より背かずんば神の恩寵の我等を棄ざるなぞ

子の教訓母の苦難

奇蹟を以てハリストス教を教へられたる聖大致命者プロコーピイのサラチンに勝たる後己の母の家へ歸りしに母己の子を大將且勝利者と見て之と喜び其熱心ある偶像信仰の女あるに依て彼と共に其諸神に祭を獻げんる爲に祭祀の準備して彼にいふや我が愛子歟汝が戦に出でしとき我手に香爐と香物を持して常に汝のことで諸神に祈らしに彼等の我の祈禱も因て汝に勝利を與へ給へり感謝せざる可らず彼等が汝の爲に將來も扶助者たらんが爲に祭祀を獻げんプロコーピイ温和にして彼に對て曰く我が

母歟爾の善く我が爲す祈禱をあし給へり然に我の己の神より
 佑助を得たりプロコービイの母フェオドシヤ之を難じて曰く
 一神を頼勿れ然らずんば他の諸神の之を聞て汝より
 避ん敬虔なるプロコービイの己の母を教誨ふるに言を
 以てせんよその先實事を以てせんと思へり故に彼の之よ
 異邦の諸神の無力を證據するの代として佑助し者の諸神
 なるかを親しく彼等に問ふことと要求めたり若彼等なら
 んに自ら彼よ此ことをいふ可し
 フェオドシヤの快く承諾せしが斯く彼等の金銀の偶像を立
 たる室に入れりプロコービイ問て曰く偽ある諸神や我汝

に問ふ謂可し我に戰に佑助けし誰なる乎偶像黙せり彼
 曰く母歟爾の諸神の此の如し彼等母よ向ふて一語をも云
 能のざれば如何して彼等が我を佑助くると得ん乎フェオド
 シヤのこの彼が嘲弄を以て彼等に問ひしが故なりと説け
 り彼の又己の子の願に因て自ら己の諸神に一々問ひしが
 聖プロコービイの彼が空しく彼等に向ふを見て己の上衣
 を脱て偶像殿より己の母と引出し手よ十字架を持って彼等
 と破毀ちしかをフェオドシヤの此が爲す怒らされて天賦の
 情愛を打忘れ直に皇帝テオクリテアンの前に出で、子が
 己を尊敬せず又其室を保護せし所の諸神の悉く破毀ちし

ことを上申せしかバテオクリデアンの彼を慰め或の寵愛
 或の威迫を以て己の子を鎮靜せんことを勧め若彼が執拗
 あらんに之を殺すべしといへり此後皇帝の縣令イウス
 トにプロコロビイを拷訊し彼若從ひざれば之を威迫し苦
 難を以て諸神に伏拜する事を強ひ猶極て執拗ある場合に
 至ふんよの之を死に渡す可しとの命を下せり
 プロコロビイの知己あるイウストの王命を受け有名なる
 諸官員を伴ふて直にエリイヌ出發しプロコロビイに接吻
 して之を偶像禮拜に向ひしめんと思へり彼れ曰く我れ皇
 帝を畏れ又私の友として爾を耻づ我爾を哀て何を爲す

と知らず我ど此榮譽ある人ども聽いて彼等と共に諸神よ
 祭祀を献げよ爾若此を爲さざれば縦ひ我爾に惡を爲すを
 欲せざるも爾自ら我をして王命を行ひしむるお至るプロ
 コロビイが皇帝の意旨を行ひんことを辭せしとき縣令の
 彼をバレステナケサリヤに拷訊せんが爲に引致かんこと
 を命せしに民の聖者を視て忿恚りイウストお直に彼が苦
 めらきんことを要求ふりしかバ縣令の己に從ひざらんが
 爲にプロコロビイを憤り又民を恐怖し彼を裸体にして之
 を木に懸け斯て鎖の熊手を以て彼れ軀を搔破らんことを
 命じたり壯年のプロコロビイの骨皮裂れて其露れし休の

部分の血と共に地に墜ると雖ども勇氣にして苦を忍受たり
 異邦人と雖或者の聖人の苦痛を目撃して其壯年あるを
 嗟惜み彼を哀痛て落涙せり聖致命者彼等に謂て曰く我が
 ことを悲嘆する勿き寧汝等の靈の亡ることを悲嘆せよ是
 唯無限なる地獄の苦を待者の悲嘆に當らんと彼の苦痛が
 人力より超越せしとき彼叫んで曰く我が神歟爾の敵を辱
 しめ爾の聖なる名を讃揚せんが爲に爾の僕を固めよ照令
 の聖なる人の聖なる祈禱と勝難き致命者の堅固を觀て遂
 に彼を木より下して罎圖お繋がんことを命じたり
 瘡痕の爲に衰弱せしプロコービイの罎圖に於て神使と救

世主より助力を得て俄に罎圖に非常ある光顯りれ罎圖の
 戸の開け鎖の罪せられし者より解け二人の神使の美麗あ
 る少年の貌にてプロコービイの前に立ち彼の遇ひしこと
 を驚異さて彼等の誰あるを問ひしかば顯りれざる者の己
 を神使と稱せりプロコービイの魔鬼の詭計を恐怖て彼等
 に謂て曰く爾等若實に神使にして若神より我に遣されし
 かば我が目前に於て主よ祈禱し十字架の形を以て己を
 保護すべし神使の彼の阻碍を解きしときプロコービイの
 復彼等お問て曰く我主の使が火爐にある三人の童子に遣
 されて火焰を消滅せしを知れり然に我の何の神使の訪問

るゝに當れるまどを爲せし乎我の如何なる火にか投入せ
 られし乎此時救世主の親彼の前に顯われ聖者の瘡痕を被
 りたる体に觸れて彼を癒し給へ主彼を謂て曰く此爾の
 今よりネアノイと稱す可らずプロコ！ノイと稱すべし致
 命者の主に己を苦の時堅固よせんことを願ひしとき主
 彼に謂て曰く恐るゝ勿れ我爾と共にすと斯て神使も主も
 見ぬざるに至れり
 翌朝縣令の復アロコノイを己の前より引致んことを命じ
 たれば彼の健康にして麗しき顔を以て其目前に立てり
 傍にある者の皆此を驚異みて看監に説明を請ひしに看監

の悉く見たることを述たりしかば多の者の異邦人の口よ
 り奇蹟を聞きてハリストスを信ぜり縣令の民がチアノイ
 の神歎我等を扶助けよとの言を聞きて裁判場を起ち衆も
 聞ゆるやう言て曰くネアノイが健康なるを何ぞ驚異乎
 諸神の彼を矜憐みて己の僕を癒し給へりと斯る恐しき訛
 言を縣令の口より聞くの致命者の爲も甚苦しかりし彼の
 衆の前より於て彼の謬を闢除うんが爲め之を難じて曰く爾
 の實に我の神の矜憐を以て癒されしと云へり然も爾の若
 此奇蹟なる癒を以て己の諸神に歸し實に彼等に因て致さ
 れしあつば我を彼等の殿に導くべし我れ彼等が我を癒せ

しや否を知らんと欲す縣令のフロコービイの言を大に悦
 びて神殿迄の道路を修飾らんことを命じ斯て公に告て貴
 族フェオドシヤの子ネアコイの悔改して蔑視せし己の諸神
 に歸向せり今彼の彼等お祭祀を献々んが爲に行くと云へ
 り民中又在りしハリステアコン等の騒擾且哀痛めり然ど
 フロコービイの時の到る迄之を黙し黙して偶像の殿に行
 けり此に至りて彼の縣令と共に入り偶像の前お立て十字
 架の形を作せしに偶像の震動ふて墜ち皆微塵に壞たれた
 り縣令の何と爲すを知らばフロコービイを囹圄より引入ま
 んことを命じて己は家に歸れり此の如き奇蹟の救贖の結

果あらずして止まず此に在りし貳人の保民官と二少隊の
 兵隊のハリステスを信じてフロコービイを來りて洗禮を願
 ひしかバフロコービイの囹圄の看監の承諾を得て彼等を
 市中に隠匿たる主教レオンタイの許に導きて之に聖洗を
 施さんことを願へり
 苦難に渡せし致命者の母フェオドシヤの何を爲せし乎彼の
 既に己の残忍なる所行を痛悔せり彼の其子を壓制する所
 の猛烈しき苦難を聞き心中にて愁傷みたりしが明日の其
 の子の結局の裁判の日ならんことを知りしかバ之を觀ん
 が爲其朝に至て赴きしが此時ハリステス教に歸せし十二

人の女を苦難に處し長く且猛烈した苦難を以て聖女等
 苦めたり然も彼等の悉の苦難を忍耐へ剛毅にして之を受
 けたりフエオドシヤの之を視て驚愕き虚さ死を以て亡ぶる
 所の甚ど剛毅なる女等を哀痛して痛く彼等のことを悲嘆
 し彼のハリストスの爲に苦難する者の勢力と剛毅とを見
 て此の如き苦難の自己の力を以て忍受くること能はずと
 の思を起し此に依て彼の神及びハリストス教に歸向ふの
 心を萌し聖アロコービイの祈禱に因て彼の靈目の開けた
 り斯て彼の民中より出で縣令又近づき剛毅にして之に謂
 て曰く我も釘せられたるハリストス神の婢なりと

縣令と其側に在りし者との驚きたりハリステアニシたる
 が故又異邦の諸神に叩拜せざるが爲に彼自ふ己の子を苦
 難に渡せしを知るを彼等如何して驚かざるを得んや彼
 有名貴族富豪なる者凡て世の幸福を輕視じて自由にし
 て苦難に付し縣令の彼を教訓せんと欲せり
 縣令曰くフエオドシヤ君歟誰か爾を迷ひして誤謬に誘ひし
 乎誰か爾に生國の諸神を棄て他の神に歸せんことと教誨
 へし乎

フエオドシヤ曰く我迷はされず又謬ふず我前に誤て魔鬼
 に迷はされて天地を創造せし眞實の神の代に人の手を以

て造られたる汚穢なる偶像を拜めり
縣令曰く我此詐欺の女等(致命女等と指す)の爾を迷ひせり
と見る

フエオドシヤ曰く縣令歎否ふす彼等の我を迷さず却て我を
教誨へふり若彼等を堅固おせし神の眞實まことも非ざれば彼等
豈此の如き剛毅を以て苦難と恐しき拷訊を受ると得んや
故に彼等の詐欺の女にのほらざるあり但爾の誤謬の扞禦
者昏黒の保護者あり爾の人々を永久の亡滅に誘引ふ
縣令曰くフエオドシヤ歎なげ己を説勸めて爾の爲に哀痛せらる
諸神に救を願ふ可し我等も彼等が爾に爾の不法と許さ

んが爲爾の爲彼等に祈禱す
フエオドシヤ曰く爾等の諸神によるに非ずして釘せらるる
るハリストス神より己が前の不信の爲又前に我に依て行
ひれたる悪事の赦されんことを願ふ
激怒たる縣令のフエオドシヤの堅固なるを見て直ただも彼と其
子が繋かるゝ囹圄に引入んことを命じたり己の子を苦難
に渡しハリストスの爲に苦難を以て子母れ邂逅するの嚴
なり聖プロコーピイの靈を以て其母のハリストスに歸
するを視たり斯て其母が囹圄に入來りしとき彼恰も知ら
ざるが如く彼に問へり

プロコーピイ曰く我の母君歟何故此又來りし乎何者か爾
を德憑て己の諸神と棄てさせし乎

フェオドシヤ曰く我が愛子歟今眞理を知れり我れ聖女等の
苦難を見て以爲く若ハリストスの爲お苦難するの彼等を
ハリストスが堅固にせざれば豈最と軟弱き女等が甚猛烈
しき苦難を忍受くることを能せんや若ハリストスの眞實
の神に非ざれば何を彼の己の爲お苦難する所の者を堅固
にするを得んやと此く思ひしとき眞理の光線は我が心お
觸れ我の己が諸神の僞なるを知て汝聖女等及び他の致命
者等が剛毅と以て表信する獨一の神を信せり

プロコーピイ曰く我の君歟爾の福なり眞實の神を認めて
彼の爲に此囹圄に來れど

此後聖プロコーピイの彼にハリストス教の眞實の法と説
けり斯て一夜竊に彼のプロコーピイに囹圄より誘出され
て主教レオンテイより聖洗と領たり彼の囹圄に歸て後靈
の喜悅に依てハリストスの爲に致命女苦難者等も勤めて
彼等の瘡痕を包み其臍を洗へり
此の如く諸神を叩拜まざるが爲よ己の子を縣令に渡せし
フェオドシヤの自らハリストスを信じて致命者の榮冠を得
るに當れり斯て長き苦難の後縣令の判決に因てプロコー

ビイの喜悅の爲に彼の榮譽ある頭ハ斬られたり然ハ神ハ
 プロコービイを尙長ク己の聖ある名を讃揚せんが爲に勤
 勞せんまどを定め給へり
 今述たる例ハ子の堅固なる信仰の事ハ兩親ハ爲に教訓と
 成るまどを顯ハせり故に子の敬虔の功績に熱心するど
 兩親ハ之を障碍げざるのみならず却て補助とあり摸範と
 ならざる可らず

忘恩

將軍ペラギイフェオドリヤを苦難ム付せし時彼將軍にいふ
 曰く妾ハ苦難を感せず反て爾が苦むと知れよペラギイ

答て曰く此我等の諸神の仁慈と彼等が爾の歸を知りて爾
 と患に因るありフェオドリヤ難じて曰く妾を恵む爾の諸神
 ハ何處よあるや今之を示せよ將軍悦て彼をアドリアンの
 殿に導くまどを命ぜり

聖女殿ハ入りアドリアンの偶像を見乃神ハ祈禱して之を
 吹たりしに恰も雷ハ打破られたる如く偶像ハ落て三
 碎たりフェオドリヤ殿より出て將軍にいふて曰く殿に入て
 己の神と助よ彼ハ落て碎さり將軍ハ其言の果して實ある
 や否やを知らんが爲恐怖と懷いて殿ハ入しが致命女の言の
 實あるを見憂愁悲嘆を以て殿より出たり是王を懼しが故

あり
 偶像碎たりとの風聞王にも達せしかを其風聞の眞偽を探
 果して眞あらんに將軍を猛獸の食に與へんため一人
 の官吏を派遣せしにペラギイ死を恐てフエオドリヤの足下
 へ俯伏し力能なすべくんば全く碎たる偶像を元の如く作
 さん事を願ひ偶像元の如く成て前の所にあるを視バハリ
 ステアニンならんとの約をなせりフエオドリヤ將軍の
 絶望と親神お祈禱し偶像を元の如く作して之を前の所に
 置たりしお王より派遣されたる者の偶像の恙あるを視將
 軍に刑を行はずして王に復命せり

斯る大恩の爲に將軍ハフエオドリヤに感謝せし乎又約に因
 て「ハリステアニン」どありし乎皆然らず王よりフエオドリヤ
 を苦るの命令下たる時彼熱心なる窘透者どありてフエオド
 リヤも行ふべき恐しき苦難を思考へたり
 「ハリステアニン」等の間よ於て往々神お感謝せざることを
 認るあり不幸或の災難我等に及たる時神に或約と立るも
 我等に欺かれたる神の罰すること能ざる者の如く憂愁去
 れバ忽己の約を忘るゝあり我等死後に屢欺き且耻なく謊
 たる者の前に豈立と得ん乎
 智識の善行を要す

大アントニイの智慧及其敬虔なる行爲と奇蹟のことの話
 の早く異邦の哲學者等にも聞えたり或二人の哲學者の彼
 が毫も學ばざるといふと聰明ありといふと聞き彼を見て
 其智慧を試みて之に勝たんと思ひしがアントニイの此を
 洞徹り自ら彼等に遇へんとて出たり
 彼等に近づきし克肖者の彼等も通辨を以て謂り敏智なる
 爾等の何故に遠く愚ある人の許み來らんことを勤め又之
 と議論せんことを欲する乎哲學者等之に答て曰く爾の愚
 ならず甚智ありアントニイ難じて曰く若爾等愚鈍者の許
 に來らんふの爾等の勞空し若爾等の我を智者と稱し自敏

智と有すると云ふは爾等の爲にの爾等の意に叶ふの智者
 に從へんこと善かるべし蓋敏智者に從ひ善者に則とるの
 各義務なり若我爾等の許に行かば爾等に則とるべし然に
 爾等我を敏智者として來らんには我の如く「ハリスデアニ
 ン」ど爲らん
 哲學者等の彼の智慧と彼等の目前に於て魔鬼を逐ひしに
 驚いて去れり
 若干の時を経て彼の無學を笑嘲らんが爲に他の詭辨者來
 れり然るに聖アントニイの自ら彼等の伎能を以て彼等と
 辱めたりアントニイ彼等に問て曰く我に答ふ可し意思と

書寫との何を前となし何を始とあす乎意思が書寫より成るか或の書寫が意思より生ずる乎來者之に謂て曰く意思の書寫れ發明者及び保護者なり此時大アントコイ彼等に謂て曰く意思聰明なる者の書寫を求めざるありなんぢら禍あるかな教法師よ知識の鑰を奪て自ら入らず且入んとする者とも阻り（ルカ十一）夫神言の教法師が多く誠命を行ふよりの信行の意の理解に練習することはいふなり敬虔なる行為と全く神を畏るゝことの日智慧なり自己の經驗よりて奥密なる天國を解せざる者の眞も我等に救贖と教誨することを能する乎己の行為と徳行とと慮からざる學

者の鳴るの銅にして常に同じき音あるのみ大アントコイの人が行為と事業よりも言語と傲慢とを以て多く教誨するが故お教訓及豫防の例を以てせしあらん

ハリストス教會の外に救贖莫し

哲學士聖イウステンの未だ異邦人にして詩學能辨學及び歴史の卓越なる教育を受けしが彼の心の此を以て満足せずして眞理を探求めしかど彼の眞理を得る能はず彼の初之を得るが爲にの哲學獨己の爲に永遠にして不易の眞理たる眞實の神と明示すと思ふて土多亞の哲學に歸せり然にイウステンの此學校お於て希望とし所を得ざれば彼の

己の進歩せざるを視てペリパテティックに歸せり然に此時著明なるペリパテティックの先づ教訓の爲に彼に金を拂いんとを求めたりしかバウステンの利慾を以て管理せらるるとて此學校をも止めたり

此時ピフゴルの學校の自己の奥妙と以て有名なり彼の或人の商議を因て一人の著名なるピフゴル黨と逢ふて之に哲學の奥義を解明せんことを願へりピフゴル黨先彼に問て曰く爾豫備の學科音學天文學及び幾何學を知る乎イウステンの此學を學はず又之を知らずと答へしに哲學者の彼を承けて己が哲學の奥義に供へんことを肯せず實に後

世に至りて神學者聖グリゴリイの己の言を以て之を破れり

然に聖イウステンの熱心の衰へず愛を以て眞理を求めて之に達せんとするの目的に己の生命を委す者の勤勞と恐れざるなり是彼の勉勵を衰弱むるのみならず却て大なる勤勞を慫慂せり

イウステンの或著名あるプラトン黨のこゝを聞いて其聽者の數に加はり甚速にプラトンの哲學に於て尤深淵尤基礎なる智識を得無形なる實体の知識の彼の魂を飛し道理の彼を奪ひ彼の速に神に親近きて明に之を悟覺するあらん

と思惟へり

然にプラトンの哲學も彼に不充分を顯ひし其目的のイウ
ステンを以て達する能はず此真正の哲學士の獨處に避け
此に在て思想を練習し彼の一時間に數度逍遙せしが神れ
慮の遂に彼に眞理を得るの場合を賜へり一度趙遙の時
彼の海邊の獨處に於て白髮にて飾られざる嚴尊ある翁に
遭ふて之と對談せり此翁の誰なるか分からざれどもエウ
セワイ及び聖メフオデイの此確に使徒一人なりと思惟ひ
或者の此聖ポリカルプありと斷言せり翁のイウステンよ
りプラトンの哲學の稱讚を聞て彼に其意思の問を出せり

此哲學の目的の果して神の認識に在るより翁の問に於
てイウステンの答の對談の接續の發端となれり認識せざ
る翁は聖イウステンが注意して其言を聞を見て豫めイウ
ステンに聖神の補助あらざれり意思の自ら神のこの充
分なる知識を有たざるを證しそをより絶えず彼に認神の
與義の人意を以て探求し難きを明示し神の人々に神子の
世に下ることを預言せし啓神の預言者を以て告ぐれ實事
及び奇蹟を以て確定したる確實なる信すべき眞理と開明
せんことと賜ひしを教へ斯て後彼の預言者等の書の現時
も尙存在して眞正の智識を照す之に依て神の勸諭を要す

と云てイウステンを保證せり翁の己の談を左の言を以て
 結べり即爾よ良心の戸の開かんが爲に神よ祈禱せよと此
 後彼のイウステンを辞せり
 哲學士イウステンの凡て翁が述しことを自筆記し己の經
 驗を以て之を信用せんことを決して彼の直に預言者及び
 使徒等の書を読みたり此既に彼のハリストス教を採るの
 豫備となれり蓋彼の徒に久く異邦の諸學校に在て探求め
 し眞理を得たりしが此後窘逐の早くハリストス教の敵等が
 起りて一層彼の靈目を開けり彼のハリストス教の敵等が
 「ハリステアノン」等に尤耻づべき讒言となして民心を激し

彼等を窘逐するに尤不正ある方法を用ひたるを觀又「ハリ
 ステアノン」等が動す可らざるの堅固を以て総ての恐しき
 苦難を受け喜悅んで死を受るを觀たりしが此より眞に彼
 等も盲なる民が歸せる所の悪行と恐るべき慾に彼等が
 全く無罪あるを判斷し哲學士の耻辱ある慾も委る人の喜
 悅を以て死を迎ふ能わざると覺りて且いへり此總て「ハリ
 ステアノン」等も歸せる悪行の彼等の教訓及び聖なる行爲
 の規則聰明なる意思の誠實及び和合の讒たると以て全く
 彼を信服せしめたり
 此後イウステンの「ハリストス」宗教を思想ふて全く其神の

功德よ勸誘められ異邦の哲學を絶ち三十歳にて聖洗を領
 て「ハリストス」教の哲學士と爲り彼の生命の終る迄異邦の
 賢者等に辨駁に對して哲學士の外套を衣ることを廢せず
 福音の眞正の隨從者と爲て總て己の殘命を使徒ある人
 どの對談異邦人イウデア人及び哲學者等との争闘を過し
 致命を以て終れり
 熱心電勉眞理と探求むる者の常に之を得るなり神の我等
 の心を知るおよび若唯利益及び必要の物を希望まんに
 常に我等に希望せし物を辞まざるあり眞に我が前の神言
 の凡て我等の必要を知りて我等に此大なる庫を開く想ふ

に「ハリストス」教の異端の幾何ぞ神言に乖戻ける解説の幾
 何ぞ聖書の眞理を行爲と動作に用ふるに於て默示の道を
 信ぜざる者の幾何ぞ蓋此惡の常に直又惡主意よりするに
 のゆらずして大抵眞理の知識の朦朧及び不充分或の輩之
 を等閑にするに因て生ずるなり聖イウステンの例の神の
 眞理及び救贖を探求むる者を棄ざると我等を勸誘るおほ
 り唯人々の翁がイウステンにいひし爾に良心の戸の開け
 んぶ爲お神に祈禱せよとの言を己に應用すべし
 兩親れ祈禱の勢力
 克肖者少セフオントの未だ世に存命せし時病に罹りしま

とあり彼の家族の其生命の爲掛念する程危篤に至れり祝
福して兒童を遺さん爲其妻マリヤの商議に因て彼等が
遊學せるフイニキヤの町ワイリトに使を遣はせしが兒童イ
アンとアルカデイの己の父の病を聞て直に途を出發し
て家に着き稍や父に蘇生の思あらしめたり
兒童の歸りしハッセルフォントを喜ばせ彼ノ墓に近りし病
も既に前の如く甚強からずハッセルフォントの死の近づきし
を思ふて己の兒童ヲ祝福して曰く
子歟我の生命の終に近けり汝等若己の父を愛せば我が汝
等に誠むることを守れよ全く神を畏れて己の行を其聖誠

に因て修む可し我尙汝等に多く言へきことあり汝等我が
驕傲に因て之を言と思ふ勿れ我汝等に徳行の道を示さん
が爲に云はん汝等若我が行と以て己の模範とせんは汝
等の他の教師を要せざるなり汝等親しく我が今時迄如何
に生活せしやを知れり我の高位の爲に非ずして温厚篤實
あるが爲に衆を愛せられ且尊敬されたり我嘗て何人をも
辱めず何人をも誣せず何人をも讒せず何人をも惡まざ
しく何人をも怒らず何人とも爭論せず我衆を愛して衆と
共和平なして生活せり朝も夕も神の聖堂に詣ることと
怠らず我乞食旅客及び被辱者を輕蔑せず言語と動作とを

以て衆と慰め獄に繋ぶる者と訪問ひ擄へらるる者を購収へり我が舌の毫も惡と詐とを言はず我が目の嘗て他人の行を嫉視す又之を羨まず

子歟己の兩親より從へよ我等の行爲信仰忍耐及び温和に則とれよ我等が生活せし如く生活せよ神に悦ばれよ神も汝等の壽と増さん施惠を貧者に與へよ寡婦と孤獨とを保護れよ獄にある者と不正に裁判せらるる者とを訪問へよ衆人に和平を有てよ信義を朋友に起せよ敵に善良なれ何人にも惡を以て惡と報る勿れ衆人に善良温和され体と靈との潔淨に意を用ひよ聖堂と修道院に施濟せよ司祭と修士

等を尊敬へよ蓋神の彼等の爲め全世界に仁慈を賜へり特に山の洞穴と地の深淵に遊歴せる行者を忘るる勿れ彼等に必要の物を給せよ乞食を養へよ自ら闕乏せざるなり蓋我が家の屢貧者の爲に宴會を設けたれども未だ嘗て缺乏せざるを知る可し屢祈禱せよ及び諸聖の教訓を聴きよ母よ正當なる尊敬を加へ畏敬と愛とを以て之を聽ひ常に其旨を行へよ萬事之に逆ふ勿れ僕等にも慈悲と加へ彼等を己の体部己の兒童れ如く愛せよ簡畧に汝等に云はんよ我が爲せしこと汝等も之を爲せよ諸聖人の尊敬と光榮とを得ん常に此世の逝り其榮の絶滅ぶるを記憶せよ我が

子歟主の誠命及び我が誠と守る可し和平の神の汝等と常に共にせん
 照管者のクセノフロントの生命の尙永續せんことを欲し彼の夢に尙多年生活せんことを告げられたり故に彼の病稍怠るに及んで彼の復己が兒童の教育を終へんが爲に前に學びしワイリキに遣はせり順從ある兒童の直に出立せしが道中に於て彼等と其兩親とを試むる所の災難の彼等を待てり必竟彼等の功勞に因て天國の彼此を榮し彼此を誘導けり
 船既に海に出で既に進航せしとき水夫等が船を指揮する

こと能いざる程の甚しき颶風起り颶風と怒濤に任せて之を放ち衆の己を救ふの望を失ひ悲哀泣哭するの聲の海の恐しく震動するの聲と和れりイチャアン及びアルカデイの死の既に近きしを視て兩親の爲に自己に寛恕を願ひ祈禱を以て神に向へり彼等祈禱して此の如く云へり曰く至善ある主平爾の造物を輕ずる勿れ我等の兩親の善良ある事を想記ひ給へ彼等の爲に我等を棄る勿れ我等に空しき死と以て我等が年の壯きに於て死すると賜ふ勿れ爾の仁慈と寛恕とを想記ひ給へ高き爾の光榮より我等の災難と視よ我等の泣聲我等の啼哭を聞けよ爾の全能なる右手を延

べて溺死と死の門より救ひ給へ死者の爾を讃揚せず然も
 我等生者の爾の至聖にして畏るべき名を讃揚す颶風の時
 を追ふて劇しく爲り衆の既に船の深淵に沈没せんとする
 を視たり蓋船の既に半破られよりアルカテイ及びイサア
 ンの己を救はんことの望を失ひ其亡滅の免る可らざるを
 思ひ自己のことに非ずして己が兩親のことを祈禱して悲
 歎きたり彼等曰く生活す可し壯健ある可し至愛ある我等
 の兩親歟爾等も我等を見ず我等も亦爾等を見ざるあり哀
 哉今兩親の祈禱の何處に在る乎彼等の乞食は施惠せし
 何處に在る乎彼等の寛恕と修士等お於けるの尊敬の何處

に在る乎彼等が我等の爲にするの祈禱の一も神は達せざ
 る乎或は我等の多罪之を遮断ざる乎哀哉我等近時我等の
 父の死を懼れて悲哀せしよ今の彼等の不可慰の悲哀と其
 悲歎の責任者と爲れり我等の父歟爾の我等が生活の幸福
 を興さんことを勉め給へり然も今に至く我等と見ず我等
 の母歟爾は己が子の爲に婚姻の室を準備へて我等の婚姻
 を見んと思ひ給へり然も今に我等の墓をも見ず
 少年者の呻吟悲哀するとき神の敵慮の彼等を視たり敬虔
 なる彼等の父と善良なる母の祈禱の神に力ありて兒童の
 救われんことを準備せり船が破れたるときクセノフオント

の子等の其側在りし僕等と共種々の状態を以て救
 れたり彼等の小さな板に因て生命を得害あくして諸方の海
 岸に持去られたり
 爾に祝福の來ふんが爲動作言語を以て爾の父母を尊敬せ
 よ蓋父の祝福の子の家を堅固にし母の呪詛の基礎迄も破
 壞す蓋父の矜恤あることゝ忘る可らず爾の罪を視ずして
 爾の幸福と増進し爾が悲歎の時爾の事を想記し氷を温よ
 り分つが如く爾の罪を斷絶す(九十四三ノ八)

兄弟の愛情

イチャアン及びアルカデイの溺死より救はれたれども浪の

爲に別々の方に漂流されたり此敬虔なる兒童の救助の爲
 に神に感謝の祈禱を献げし後各兄弟の爲に請願するの祈
 禱をなせり此の如く彼等一の他を愛せり
 死の恐喝より救はれし後イチャアン己の手を上あがに擧あげて己
 の弟アルカデイのこゝを祈禱せり曰く我を海の浪及び不
 幸の死より救ひし主歟爾の僕我の弟アルカデイを救ひ給
 へ爾我と救ひし如く彼をも痛ましき死より救ひ給へ爾若
 彼を保護して陸に引き給ひ彼が修士の生活を希望みて
 之に傾かんが爲彼と此意思に向ひしめ給へ
 颶風より救はれたるアルカデイも同時に己の兄イチャアン

のこを祈禱せり曰くアウラムの主神イサアクは神イ
 アコフの神我が父の神歟我を擾乱と颶風より救助ふて我
 既に望まざりし生命を復我に賜ひし爾に感謝す至仁ある
 爾が我を救ひし如く爾の僕我が兄イチャアソも救ひ賜へ
 我の主神や爾に祈る爾の矜憐に因て浪と颶風の彼を溺さ
 ず海の深淵の彼と犠牲にせざらんが爲に彼を守り給へ
 若我等も此の如き熱心を以て己が兄弟の爲に祈禱せば神
 の其祈禱を拒絶ざるを「ハリステアオン」等の互の愛を以
 てせば我等斷て神を己の父と稱するを得て我等唯一の
 仁慈ある天の父の眞の兄弟又子たるを證せん

貞節の美を守るの戦争に等し

戦争に出發して彼尙生さん手將生國の爲己の靈を棄る
 乎誰も之を知る能はず故に兵士が戦を準備するときの特
 に己を清潔に守らざる可らず其死すべきを知て己を肉体
 の罪より守らざるの兵士の神の審判如何に之を待する乎
 故に左の例の示すが如く神の特に戦争の時罪を制するの
 兵士を保護し給ふなり

グレナヤの皇帝ニキッオルがボルガル人と戦ひしとき大將
 ニコライの出師中或時一の客舎に泊り喫飯せし後神は祈
 禱して寢に就けり

客舎の主人に女あり大將を見て淫慾を起せり彼の少く自
 心も抵抗せし後夜中彼の處に行て之を罪に傾けんことを
 決し三更と過し頃彼の静に大將の室に到りて寢床に近づ
 き寢者と起せしに彼の覺めて己の前も主人の女のあると
 見たり彼問て曰く爾の何を要むる乎彼の猥言を以て彼の
 心も色慾を起さしめんと欲せしに敬虔なる軍士の堅固に
 して誘惑に陥らず之に謂て曰く女歟之を絶よ己が處女を
 るを汚す勿れ禍ある我をも地獄に下す勿れ處女の辱めら
 れて大將を絶てり
 若干時過て彼の再來りて復之を罪に誘へんとせしに皇帝

と神との軍士の復之を己れより逐出せしが彼の遂に三
 ひまで來れり大將の憤激りて之に左の言と以て美なる教
 訓を加へたり彼之を謂て曰く禍ある淫婦歟爾の魔鬼が烈
 しく爾も情慾を起して爾を擾乱すを見ざる乎彼等の爾と
 衆の笑嘲爾が兩親の爲に誹謗と爲せり若彼等も從へんに
 の爾の靈をも地獄に下さん爾の我が野蠻の民と戦はんが
 爲よ赴くを見ん豈我が戦争も赴く時我の身体を汚すべけ
 ん乎我の神の扶助に因て己と汚さずと此の如く充分に耻
 辱を與へて彼を己より逐出せよ
 大將の堅固の賞せられたり翌夜彼の夢も或光明ある所に

在りて彼の側に在て右足を左に置くの有力者を見たり有力者彼に謂て曰く二方の軍人を見し乎主敵見るグレチヤ人のボルガル人を斬る彼の有力者も向て其左足の右に置くを見たり後軍人を見ればボルガル人のグレチヤ人を伐倒すを見たり殺戮の終りたる後有力者大將も謂て曰く殺戮を見よ且見る所と告げよ大將對て曰く主敵全田の屍を布たり唯一の大ならざる所の一人の爲として存せり有力者問て曰く爾の此事を如何に思ふ乎大將對て曰く秋毫も此事を解す能はず是も於て有力者彼も謂て曰く爾が見し所の一人の爲に備へられたる地の空處と繁草の地は爾の

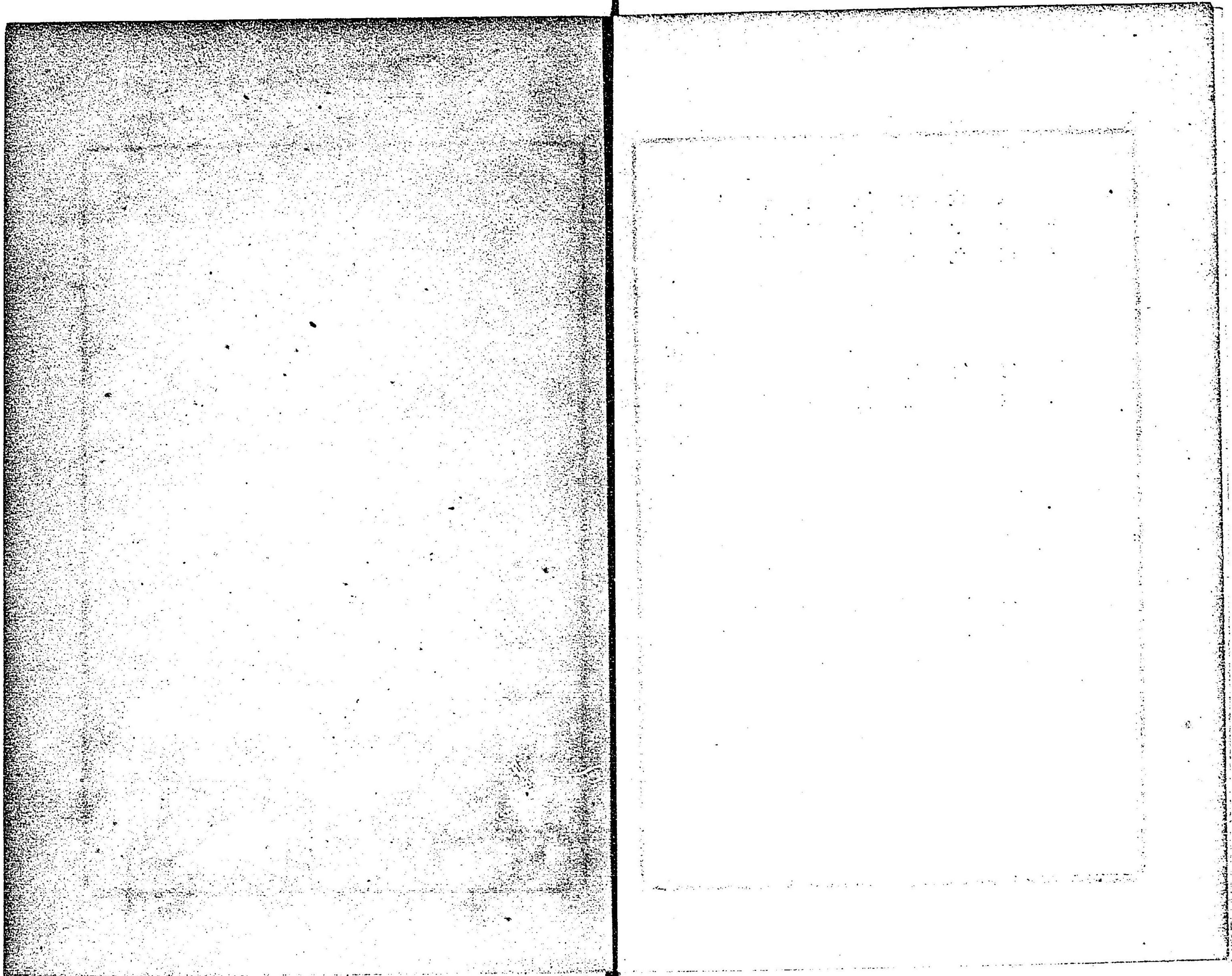
爲も備へられたり爾の朋友と共に死して閑散の地を執らざる可らず然るも爾の昨夜淫鬼と三たび戦ひ彼が爾を汚罪に誘ひしとき剛毅おして之も勝ち爾自己を愧より自由にし己の靈を肉体と共に救へり
 戦争終りしとき大將ニコライの神に感謝し己の爵位を解て修士の容態を装ひ久く修道院に居て大且聰慧なる師父等の一人とあれり
 己の生命を皇帝及び生國の爲に棄るの善し然に又此生命を潔淨よして汚穢さるることを思ひざる可らず神に好せらるゝ生國の爲の犠牲の死に若軍士が清潔の靈と汚穢れ

ざる心を以て表のさんに一層神も好せらる戦争に於ても善良なるハリステアコンと爲る可し神の此の思慮の外に於て特に清潔の良心を以て戦争に赴く所の軍士の生命を保護す

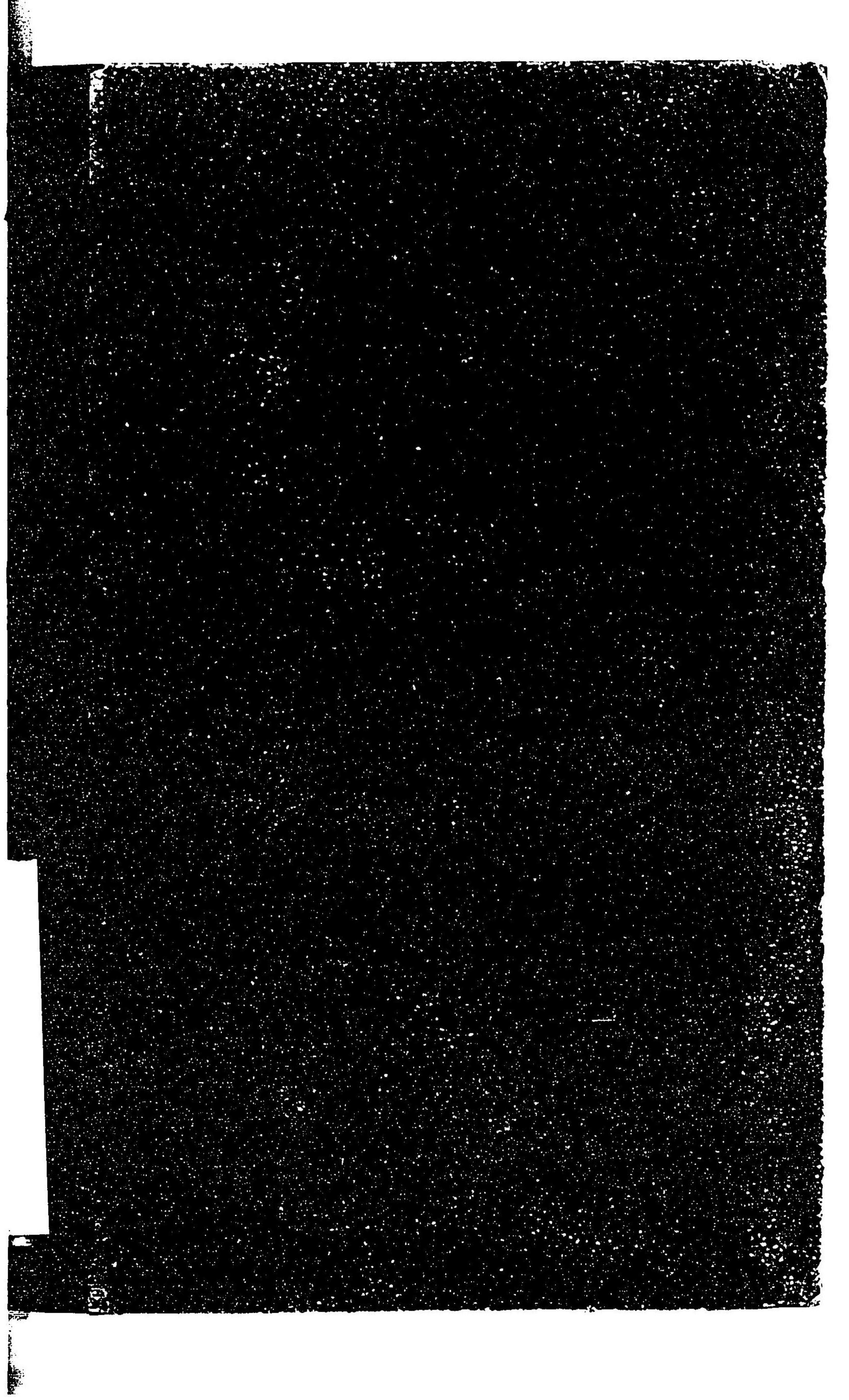
敬虔の範終

正誤

- 七 第一行 失場の矢場ノ誤
- 十三 第五行 なるのありノ誤
- 卅二 第一行 彼等の我等ノ誤
- 五十七 第三行 増加の増加ノ誤
- 六十八 第九行 斯くの斯てノ誤
- 六十九 第十行 諸神の諸神をノ誤
- 八十四 第六行 摸範の模範ノ誤
- 八十五 第二行 患の患ノ誤



33
177



33

177

020609-000-3

33-177

敬虔の範

石田 約翰/訳

M19

ABI-0424



